

宗教について

<日本人の宗教観>	1
● 日本人は無宗教なのか ← 池上 彰.....	1
● 「愛」か「和」か.....	1
● 17条憲法は「日本人の原理」を述べていた.....	1
● 儒教でも仏教でもない「和」の出どころ.....	1
● 儒教は「差別」が基本.....	1
● 「和」が乱されると「怨念」が発生する.....	1
<仏教>	2
● 仏教の悟りはひとつの山のようなもの	2
● 釈迦.....	2
● 「空」と「輪廻」	2
● 大乘仏教と小乗仏教	2
● 阿弥陀如来	2
● 仏教では「霊」を認めない.....	3
● 日本の怨霊と仏教が結びつくと.....	3
● 観想念仏.....	3
● 浄土宗	3
● 浄土真宗.....	3
● 日本の仏教はインスタント仏教か.....	3
● 禅宗（曹洞宗・臨済宗）	4
● 檀家制度.....	4
● 四十九日.....	4
● 法華経（日蓮宗）	4
● 真言宗	5
● 天台宗	5
● 戒名でぼられる	5
● 如来と菩薩	5
<神道>	6
● 日本人は神道の宗徒である	6
● 「穢れ」は捨てなければ解消しない.....	6
● 「穢れ」を水にながすのが「 ^{みそ} 禊ぎ」	6
● 日本人における罪は「穢れ」	6
● 汚い奴とアンフェアのへだたり.....	6

● 日本人の中心思想は「禊ぎ」だった.....	6
● 神道の「言霊」	6
● 契約.....	6
● お祭りと神社.....	6
● 日本の神道と多神教	7
< 儒教 >	8
● 儒教は宗教か.....	8
● 忠か孝か.....	8
● 韓国は今も儒教が生きる国。	8
● 官尊民卑.....	8
● 儒教は保守的、反近代的	8
● 「恨」と「水に流す」	8
● 生きる前には、必ず宗教的な問いがある.....	8
< キリスト教・(ユダヤ教) >	9
● 造物主	9
● キリスト教の分類 ← 池上 彰.....	9
● 解釈権とプロテスタント	9
● 無心論者は悪魔	9
● 経典.....	9
● ハルマゲドン (終末戦争)	9
< イスラム教 >	11
● イスラム教からはキリスト教は不完全にみえる	11
● 偶像をおがんではならない.....	11
● 食物規定.....	11
● 六つの信 (イーマン)	11
● 五つの行 (イバーダート)	11
● スンニ派とシーア派	12
● 世界の1 / 5がイスラム教.....	12
● ユダヤ、キリスト、イスラムの三つ巴	12
< 世界宗教生誕年表 >	13
< 参考書 >	13
● 井沢元彦の世界宗教口座	13
● 池上彰の宗教がわかれば世界が見える	13

<エホバの証人（インターネットより）>	14
● 概要	14
● 神の名	14
● 神の王国	14
● 他宗教に対する見解	14
● 統計	15
● 主要な教理	15
● その他、特徴的な教理	15
● 医療行為に関して	16
● 慣行	16
● 国旗敬礼、国歌斉唱	16
● 兵役拒否	16
● 政治に対する姿勢	17
● 血液に関する見解	17
● 他宗教との関係	17
<進化論を信じるか否かについての各国調査>	18
<世界の各宗教の人口分布とその他> ← 池上 彰	20
● 各宗教の人口分布	20
● エルサレム	20
● ヒンズー教とバラモン教	20
<宗教と気候風土> ← 池上 彰	21
● ユダヤ教と気候風土	21
● イスラム教と気候風土	21
● バラモン教と輪廻転生	21
<進化論と宗教（インターネットより）>	22

<日本人の宗教観>

● 日本人は無宗教なのか ← 池上 彰

日本では、子供が生まれたら神社、七五三も神社、結婚式は教会、葬式はお寺でということが、当たり前に行われる。日本人の多くが「無宗教」と答える。

しかし、日本人は単なる無宗教ではなく、日本人なりの宗教観をもっている。すなわち、超自然的なものに対する畏れのような宗教意識をしっかりと持っている。広く神仏を信じる気持ちはしっかりと持っている。また、自分が信じていない宗教にも敬意を払うことができる。

● 「愛」か「和」か

日本人が大切にしているもの：「和」、アメリカ人の場合：「愛」（特に家族に対する）、韓国人の場合：「孝」（親孝行）

● 17条憲法は「日本人の原理」を述べていた

聖徳大使：皇太子、日本最初のインテリ、十七条の憲法、日本の仏教者の中で最初の聖者
十七条の憲法は、「日本人の原理」を述べている。第一条は「和を以て貴しとなす」で始まっている。

● 儒教でも仏教でもない「和」の出どころ

「和」というのは儒教でも仏教でもない。

「和を以て貴しとなす」：お互いの心が和らいで協力することが尊いという考え方。

神とか仏という視点から見れば人間は不完全なものだから、そういう不完全なものが神や仏を抜きにして話し合っても真理・道理ができるはずがないわけです。

日本人：話し合いさえすれば、何事も成し遂げられないことはない。

話し合いはすべての真理、神の教えや仏の教えよりも優先する。

● 儒教は「差別」が基本

儒教は、「差別」が基本になっている。「官尊民卑・男尊女卑」。

これと反対の民主主義は一言で言えば、一人一票。一人一票だというのは。実は造物主思想からできている。神様に比べれば人間というのはただのチリだという考え方だから、一人一票でもいい。つまり、人間には本来上下の差別はないという考え方。

● 「和」が乱されると「怨念」が発生する

日本人は怨念が世界の不幸の原因であると考えています。怨念というのは一番よくないものであって、それを発生させないためにはどうしたらよいか、それが話し合いをすることであり、話し合いによって「和」を保つことなのです。

<仏教>

● 仏教の悟りはひとつの山のようなもの

仏教では根本経典がない。ないのだからキリスト教以上に多くの宗派に分かれている。

● 釈迦

釈迦は実在の人物。紀元前五世紀くらいの人？ 北部インド（今のネパール）で釈迦族の王子として生まれた。釈迦は部族名。仏教の坊さんがよく釈迦牟尼という。牟尼は聖者という意味なので、釈迦族の聖者という意味になる。

ブッダともよばれますが、それは「心理に目覚めた人」という意味。感じでは仏陀と宛てますが、これは「悟りを開いた人」という意味。釈迦は29歳の時に出家し、35歳の時に悟りを開いたと伝えられています。

四苦：人間というものは生きていく限り必ず苦しみに襲われる。生きることの苦しみ、病むことの苦しみ、老いることの苦しみ、死ぬことの苦しみ。

無常：常なるものは何もない。

● 「空」と「輪廻」

どうして、無常になりかという、この世のすべてのものが「空」であるということ。「空」とは、ものはあるけれどもすべては永遠のものではなくて、必ずいつかは消えゆくということ。

六道の輪廻（古代インドの考え方、ヒンズー教）：生前に良いことをしていたら良い世界（もの）に生まれ変わる。悪い行いをしていたら悪い世界（もの）に生まれ変わる。六道は、上から天上界、人間界、修羅道、畜生道、餓鬼道、地獄。

輪廻の中で生まれ変わってくることは苦しみであるので、そういうことがない状態、すなわち解脱して輪廻の和から外へ出ていく。これが涅槃である。

人間には百八の煩悩。“煩悩をなくせば苦しみがなくなる”と釈迦は考えた。世の中の無常を悟れば、煩悩がなくなり苦しむことはない。

人間というものは煩悩があるから迷うのである。煩悩を捨て去ればよい。この世のことはすべて無常と悟ればよい。悟った人間のことを仏陀という。

仏教というのは一口で言うと仏になるための道。

● 大乘仏教と小乗仏教

インドで根本分裂：大乘仏教と小乗仏教

大乘は大きな乗り物、小乗は小さな乗り物。

大乘仏教：一人を救うのではなく、みんなを救う、みんなが救われる。人間は一人一人が悟る能力はないのだけれども、すごく偉大な仏陀（悟りを開いた人）の中に、全然修行しないようなレベルの人間でも、自分のところに呼び寄せてくれる仏陀がもしいたとしたら、その仏陀を進行してお願いすれば輪廻の外の浄土に生まれ変わる。往生することができる。

小乗仏教：あくまでも救われるためには仏にならねばならない。一人一人が出家して、修行しなければいけない。

宗祖である釈迦の考え方は、やはり小乗仏教に近い。

● 阿弥陀如来

如来も覚者も仏陀も悟った者の意味で同じ。自分を信仰すれば自分のいる浄土に生まれ変わら

せてあげると約束してくれる人がいれば、その人にお祈りすればよい。その人のいる浄土に生まれ変われば、阿弥陀仏の指導が受けられる。悟りの前段階として浄土に行こう。これが浄土信仰であり阿弥陀信仰。阿弥陀様のいる浄土のことを特に極楽という。浄土に一度生まれ変われば、ほかの世界には生まれ変わらない。その世界で仏陀になれる。阿弥陀信仰も一種の大乗。

● 仏教では「霊」を認めない

仏教、特に釈迦の言い出した仏教は、「霊」(肉体を離れた個性・自我) というものは認めていない。仏教は輪廻転生の世界だから、生前の行いにより何か(豚かも)に生まれ変わる。

● 日本の怨霊と仏教が結びつくと

日本は怨霊が絶対いるという社会。これをいかに鎮魂するかが宗教の中で最も重要なテーマであった。

日本の考え方では、色々の神様がいていいじゃないか。その時々でいい神様を選べばいいじゃないか。

「怨霊」は仏教では存在しないはずのものなのに、それを仏教の力で鎮めるといような日本的な期待のされ方をしてしまった。

● 観想念仏

日常あらゆる機会をとらえて阿弥陀如来のいる極楽のことを頭に思い浮かべなさい。死ぬ時も最後まで極楽浄土を念じていれば生まれ変われますよ。

● 浄土宗

法然が考え出した。法然は天台宗の比叡山延暦寺にいた。弟子は浄土真宗の親鸞。阿弥陀浄土(極楽浄土)へ行くために、阿弥陀如来の力、つまり自分の力でなくて他の力によって救われようとする。他力本願の考え方。

法然は自力の修行を捨てた。自分の力で仏になることはきっぱり諦めた。自分はそのなりに力はないから阿弥陀如来にすがっていくしかない。念仏というのはそんな面倒くさいことをしなくていい。

唱名念仏：阿弥陀仏の名前を唱えればいいのではないか。「南無阿弥陀仏」といえよ。唱えれば唱えるほどいい。「南無」はああとという呼びかけ。

「南無阿弥陀仏」は、「この世界に満ち満ちる、限りない光と限りない生命の仏様にお任せして生きていきます」という意味。「阿弥陀」というのは、「無限の光あるいは無限の幸い」という意味。

総本山は知恩院(京都市)。

● 浄土真宗

親鸞は師匠の法然の説をさらに修正。一番大切なのは回数ではなく「信」である。「信」さえあれば念仏は一回でもいい。

西本願寺(京都市)は正しくは龍谷山本願寺といい、浄土真宗本願寺派の本山です。

一方、東本願寺(京都市)は正しくは「真宗本廟」といい、真宗大谷派の本山です。

● 日本の仏教はインスタント仏教か

親鸞は、坊さんでありながら結婚。本来、仏教のお坊さんは絶対に結婚してはいけない。今でも韓国や中国ではそう。仏教ではお坊さんは出家するのが基本であり、出家というのは釈迦の例のように妻子を捨てるものであって、結婚してはいけない。本当は今でも、浄土宗以外の宗

派のお坊さんは結婚してはいけないはず。女性は釈迦の時代から仏教の救済の対象になっていないが、浄土真宗は、男も女も救われるということで爆発的に流行。

● 禅宗（曹洞宗・臨済宗）

仏教の一派。もっぱら座禅を修行し、心性の本源を悟ろうとする宗門。達磨(だるま)が中国に伝え、日本には鎌倉初期に栄西が臨済禅を、次いで道元が曹洞禅。

禅宗は、宗派の中で一番釈迦の仏教に似ている。つまり自力＝出家主義である。一番典型的な人は道元。道元は中国に行って、人間というものには必ず出家して自力で修行しなければならないことを学んだ。その修行の手段として持ってきたのが座禅である。禅宗での本尊は一応は釈迦如来であるが、あくまでも自分の力で悟りを開くことをあくまで基本。難しい試験があつて、釈迦如来は最初に試験にパスした人。

曹洞宗は道元が開いた。自分の仏教は、釈迦の教えを継ぐ正しい仏教であると信じていた。本山は永平寺(福井県)。

臨済宗は、派によって総本山は異なります。例えば、臨済宗妙心寺派は大本山妙心寺（京都市右京区）、臨済宗建長寺派は大本山建長寺（鎌倉市）、臨済宗南禅寺派は大本山南禅寺（京都市左京区）臨済宗東福寺派は大本山東福寺（京都市東山区）、臨済宗天龍寺派は大本山天龍寺（京都市右京区）、臨済宗大徳寺派は大本山大徳寺（京都市北区）など。

● 檀家制度

徳川家康は日本の仏教をダメにした。つまり檀家制度というものを作って、江戸時代に生まれた人間は必ずどこかのお寺の檀家の人間ということにした。宗教から競争をなくした。

檀家とは本来、寺院を経済的に支援する人のこと。

この檀家制度のもと、家々に仏壇が置かれ、法要に僧侶を招くという監修ができ、彼岸の墓参りや盆の法事などが定着。

● 四十九日

人間が亡くなったあと、その魂がどういうふうにして何処へ行くのか？亡くなった人の魂が四十九日の旅をして、そこから輪廻と解脱という方向に別れる。七日ごとに魂を守ってくれる仏（最初が不動明王、最後が釈迦如来）がいて、その仏に供養をすることが、七回行われる。輪廻ということになると、また生老病死の苦しみにつながるの、解脱の世界には行ってほしいという祈りを込めて法要する。

● 法華経（日蓮宗）

日蓮が開祖。日蓮は、日本の仏教者には珍しいタイプ。一種キリスト教的預言者というタイプの人間。法華経が一番正しくて他の宗派は皆間違っている。非常に戦闘的な宗派。法華経を信じ、それを広めることに努力した人間は必ず救われる。

法華経には、他の宗教にはない女人救済ということが書いてある。

いままでの仏教はすべて彼岸主義。彼岸というのは彼方の岸、すなわちあの世のこと。彼岸主義では、来世どうなるのか、来世に救われるのか、極楽に行けるのか、ということが基本で、今生きているこの現世ではどうするのかということが書いていない。法華経では今生きているこの世が即浄土になる。法華経では、お釈迦様は死んでいない、現世に留まっていると書かれている。

信じるだけでなく広めなくてはならない。それが大事である。そして、そういうことをやった

人間こそが救われる。法華経というのは略した言い方で、本来は「妙法蓮華教」という。妙なる法を説いた蓮華（蓮の花）のようなすばらしいお経。「南無妙法蓮華教」という「お題目」を唱えることが重要。「南無」はああとという呼びかけ。「南無妙法蓮華教」は、「妙法蓮華教（法華経）」に帰依しますという意味。

浄土宗では「南無阿弥陀仏」で「お念仏」という。法華経では、どうして自分たちが良くて他がいけないのかということ、間違った教えを信じている人の所に行って説得して考えを変えさせなければいけない。それを「折伏」という。

● 真言宗

平安初期、入唐した空海（弘法大師）が恵果から密教を受けて帰国、開宗した。大日如来の悟りの世界を直接明らかにしようとするもので、即身成仏を説く。

真言宗には、数多くの「宗派」があり、実は、それぞれの宗派に、総本山や大本山があり、主要な本山を「18本山」と呼んでいます。例えば、高野山・真言宗の総本山は金剛峰寺（和歌山県伊都郡）、東寺・真言宗は教王護国寺（通称は東寺、京都市）。

● 天台宗

妙法蓮華経（法華経）を根本経典。入唐した最澄（伝教大師）によって平安時代初期（9世紀）に日本に伝えられた。比叡山延暦寺が本山になります。法華経を中心とする大乘仏教全般を学ぶ宗派とも言われます。天台宗の教えの一部をとりあげて、浄土宗、浄土真宗、臨済宗、曹洞宗、時宗、日蓮宗が生まれたともいわれます。天台宗の総本山は比叡山延暦寺（滋賀）。

● 戒名でばれる

「戒名」（出家者としての名前）という制度は、本当はなかった。インド仏教にも、中国仏教にもない。日本で勝手に作った。自分で勝手に戒名を作ってもいい。浄土真宗では受戒しないので戒名といわず「法名」という。親鸞が「戒」を捨てて肉食妻帯しているから。とにかく今の葬式の時のぼり方というのはすごいものがあります。いずれ社会問題になると思います。

● 如来と菩薩

如来（悟りをひらいた者）：釈迦如来、阿弥陀如来、薬師如来、大日如来等

如来の中の如来をつくろうということで考えられたのが、大日如来。大日というのは太陽のことで、太陽のようにあまねく世界をおおている如来。

菩薩：将来如来になる資格を持ったもので、現在は悟りを開いていなくて、修行中。たとえば、観音菩薩は、本来悟りを開く力は持っているのですが、悟りを開いて彼岸に行ってしまうので、こちらの人を救うために敢えて留まってくれている。すなわち、解脱しようと思えば出来る身でありながら、あえて人を救済するために、この世に戻ってきた人。たとえば、チベットの宗教指導者、ダライ・ラマは菩薩である。

<神道>

● 日本人は神道の宗徒である

何を信じているのかという点、一つは「穢れ」であり、一つは「言霊」。

「穢れ」は「汚れ」とは違って、落ちない。日本人は人の使った箸を使うのは嫌。他人の使ったものは、何となく汚い感じがする。

● 「穢れ」は捨てなければ解消しない

葬式の時の風習として、霊柩車が出るときに故人の使っていた茶碗を割る習慣。これは仏教とは関係ない。仏教ではむしろそういうものをどんどん使えと言う。

● 「穢れ」を水にながすのが「禊ぎ」

大体きれいな水の中にいれば「穢れ」は取れる。「水に流す」というのはこれである。怒りとか、憎しみとか、恨みも全部「穢れ」。「穢れ」は全部水に流すという考えが神道の中にある。「水に流す」というの、今でも日本人における最高の価値の一つ。「水に流す」というのは、あくまで日本人独自の価値観であって、それを相手に期待してはいけないのではないか。

● 日本人における罪は「穢れ」

日本人は前科者に対する差別はきつい。アメリカなどでは、罪を犯しても、刑務所で服役してきたとすれば、その人に対してあまり差別しない。日本では、刑期を済ませば罪は消えたはずなのに「穢れ」は消えない。

● 汚い奴とアンフェアのへだたり

日本では「汚い奴」ということは一番悪いとされる。アメリカでは、不公正、アンフェアというのが一番許せない。

「死」とは一種の「穢れ」。「穢れ」を普通の人間が扱いたくない。これが「非人」という考え方につながっている。死体の処理を特別の階層を作ってやらせようということを出て来たのが「非人」の考え方。

● 日本人の中心思想は「禊ぎ」だった

宗教というのは、科学や、理性や、合理的な考え方では割り切れないものを信じるということが基本にはある。「穢れ」は、日本人の一種の原始的な宗教感情。

「穢れ」をなくすことを「清める」という。清める手段が「禊ぎ」であり、「禊ぎ」とは、日本においては綺麗な水の中に入って「汚れ」を流すということ。「水に流す」というのは、日本人が一番好きな「穢れ」の清め方。日本は罪というものも「禊ぎ」をすれば綺麗になってしまう。これは他の宗教とは一番ちがう。キリスト教、イスラム教、ヒンズー教においても、罪というものはそんなに簡単に洗い清められるものではない。

● 神道の「言霊」

「言霊」の定義は、言葉に霊的な力があるという思想。

● 契約

日本人の契約というのは、一枚のぺらぺらの紙が多い。おめでたいことしか書いていなくて最後に何かトラブルがあった時には、双方が誠意をもって話し合うとか書いてある。これは、西洋では成立しないやり方。

● お祭りと神社

そもそも「お祭り」は、稲作農耕の神様に五穀豊穡をお祈りし、感謝するというところから始まっている。お祭りをするための空間が「神社」。もともとはお祭りの時だけ神様を一時的にお迎えする場所。という意味で「社^{やしら}」と呼んでいた。

● **日本の神道と多神教**

豊かな自然があり、湧水^{やしら}が流れ、緑が育ち、いろんなところに生命が生まれてくる土地では、水にも気にも医師にも、いたるところに神様がいることになる。それが神道の^{やおよろず}八百万神々になっている。一番位の高い神様が天照大神。

< 儒教 >

● 儒教は宗教か

儒教は儒学という学問であるという人もいる。日本に入ってきたのは圧倒的に儒学であって、儒教ではない。儒教という場合は宗教であり、儒学という場合は哲学である。その理由の一つに、儒教が天の存在を認めている。天というのは、人間を超越した意思を持つ何か。

● 忠か孝か

儒教には祖霊信仰（祖先の霊を信仰）の面がある。ご先祖様に対して一番守らねばならないことは「孝」。子孫を絶やさない、先祖のお祭りを絶やさない、先祖供養をする。

日本人は「忠」あるいは「忠孝」ということをいう。中国語では「義」。お殿様のように自分と血縁関係がない人に忠実であることを「忠義」、親に対して忠実であることを「孝」という。

儒教では、「孝」が一番大事。親の遺言には逆らえない。保守的になり反進歩的になる。これが儒教の最大の欠点。

● 韓国は今も儒教が生きる国。

韓国は今でもすごい儒教国である。

● 官尊民卑

儒教のもう一つの特徴は、官尊民卑と男尊女卑。

● 儒教は保守的、反近代的

日本人は儒教を50%くらいしか受け入れていない。日本はいまだに官尊民卑で、これは儒教の影響。

台湾、韓国、香港、シンガポールの4つが経済発展した共通点は、韓国人は儒教というが、それは植民地化ではないか。植民化によって、本来、保守的な儒教というものが打破されたためではないか。

● 「恨」と「水に流す」

水に流したほうが立派だという考え方は、世界中ではどちらかというと日本人独特の考え方。日本人は恨みとかは水に流すのがいい、恨みは長い間持ち続けるものはよくないと思っている。ところが、韓国人は「恨」というものは、人間として持つのは当然であり、これはすべてのエネルギーであると肯定的に評価する。

● 生きる前には、必ず宗教的な問いがある

「生き方」というものに対して、神をどういうふうに考えるのか、いると考えるのか、いないと考えるのか、ということが根底にある。死後の世界とか、霊という肉体と離れた個性があるのかないのかということを考える中で、宗教が生まれてきた。

<キリスト教・(ユダヤ教)>

●造物主

キリスト教は、造物主(創造主ともいう、英語では Creator)という考え方。造物主とは万物を作った神。

普通、キリスト教は全部、土葬。“いつかこの世は終わり、その時に本当の善人と悪人を神がより分ける”(最後の審判)という思想がある。その時、善人の死者はすべて^{よみがえ}甦ると、ヨハネの福音書には書いてある。

●キリスト教の分類 ← 池上 彰

西暦 395 年にローマ帝国が東西に分裂→1054 年にキリスト教会も分裂。西がローマ・カトリック教会、東が東方正教会(ギリシャ正教会)→16 世紀にローマ・カトリック教会からプロテスタントが分裂。(マルチン・ルターを中心とする宗教改革。)

●解釈権とプロテスタント

聖書に書いてないことの判断は、誰かが、聖書の記述から類推して確定(これを「解釈」という)する。中世の西ヨーロッパ社会では、ローマ教皇だけがこの解釈権を持っていた。

このローマ教皇の解釈権を認めないというのが、新教徒(プロテスタント)。

プロテスタントは聖職者階級を原則的に認めない。

カトリックの場合は「神父」、プロテスタントの場合は「牧師」という。神父は、神と人間の間に立つ特別な階級で、結婚は許されない。

「神父」が偉くなると「司祭」、もうちょっと偉くなると「司教」、さらに「大司教」、さらに偉くなると「枢機卿」、その上が「教皇」。

“キリスト教の本来の教えからいえば、人間に区別はないので、聖職者は要らないのではないか”というのがプロテスタントの立場。牧師はあくまでも信徒の代表。牧師は結婚もできる。

●無心論者は悪魔

無神論者は、神を信じる心もない恐ろしい人間、人でなしであり悪魔であると見られる。

天地創造、アダムとイブの神話では、神が一週間のうち、六日間かけてこの世のすべてのものを造った。最初は聞しかなかったのを、光を造り、天と地を造り、我々の人間の住める世界を造り、生物を造り、最後に人間のアダムとイブを造った。そして神は七日目に休まれた、これが日曜日です。(六千年前?)

●経典

キリスト教では教典は二つで旧約聖書と新約聖書。この場合の「約」は契約の約。

旧約聖書は、ユダヤ教の根本聖典で、ユダヤ民族が神(造物主)と結んだ契約。

ユダヤ人の中からイエスという人が出てくる。神というものが姿を変えて人間界に現れたもの、それがキリストであると考える。このキリストが今度はユダヤ民族だけでなく全世界の人々と契約を結んだ。これが新約である。

ユダヤ教徒にとっては旧約しかない。キリスト教徒はユダヤ教の契約を旧約、キリストと結んだ契約は新約という。

宗教的シンボルとしてはイエスが原点であるが、実際の教義を作ったのは弟子のパウロ。

●ハルマゲドン(終末戦争)

聖書の「ヨハネの黙示録」では、世界の終末をなす善と悪との決戦の後、イエスが降臨して、忠実な信徒であった善人のみを救い出し、至福の王国を作る。

この世の終わりに救世主が現れるという週末進行自体は、ユダヤ教やイスラム教といった一神教の宗教に共通する考え方。

<イスラム教>

● イスラム教からはキリスト教は不完全にみえる

イスラム教は、その信徒に言わせるとキリスト教がさらに発展して完全な形になったものである。イスラム教徒の信じている神様もキリスト教の信じている神様と同じ造物主。ただし、彼らはアッラー（アラー）という。彼らはイエスを神としては認めません。預言者として認めるのです。預言者とは本当の神の言葉を預かった者という意味。イエスは、神の預言者の一人に過ぎない。最後の預言者はマホメット（ムハンマド）である。キリスト教側から見ると、イスラム教徒はありもしないことを後からくつつけたとんでもない奴だと考える。コーランは、マホメットが聞いた「神の言葉」を記録したもの。

● 偶像をおがんではならない

女性はチャドルというものをかぶらなければならない。特に人妻はそうですが、顔や体の線は隠さねばならない。男尊女卑のところあり。

偶像崇拝を一切認めない。教会にあたる寺院のようなものがあるが、中に入ると画像とか絵姿、神像は一切ない。祭壇のような物があるがそこに対して礼拝をする。

● 食物規定

イスラム教は戒律宗教。戒律というのは、酒をのんではいけない、豚肉を食べてはいけない。なぜ豚肉は駄目か、実はよく分からない。一応、豚肉は汚いということになっている。ヒンズー教では、牛肉が駄目で、それは神の使いだから。

● 六つの信（イーマン）

①アラーという唯一の神を信じなさい。

②超絶的な力を持った人たちがいる（天使）ことを信じなさい。

③コーラン（聖典、原語ではクルアーン）に書いてあることを信じなさい。

④予言者（ムハンマド）を信じなさい。

⑤アーヒラート（来世）を信じなさい。イスラム教の信仰と戒律を守れば、天国へ行ける。具体的には、一日に5回礼拝しなさい、豚肉は食べるな、妻は4人まで、断食（サウム）を必ず一年の内一回しなさいとか、コーランに書いてあることを守れば天国のような所へ行ける。

⑥カダル（天命）を信じなさい。この世に起きるいろんな現象は、すべて神のアラーの意志に沿ったものである。

● 五つの行（イバーダート）

①シャハーダ（信仰告白）。心の中では信じていても口に出さないのは駄目。殉教（教えのために死ぬ）は、天国に行ける。

②サラート（礼拝）。言うだけでなくもっと神様を信じているということを形（床に土下座）にしているのがサラート（礼拝）である。かならずメッカの方を向いて行う。殉教（教えのために死ぬ）は、天国に行ける。

③サウム（断食）。これはなぜやらなければならないか、信仰上の根拠はよく分からない。断食をやる月、第9月のことをラマザンという。日が昇って沈むまで、水・食物・煙草もいっさい駄目。一ヶ月やる。

④ザカート（喜捨）。施しといったほうが分かりやすい。貧しい人に施しをすること。

⑤ハッジ（巡礼）。カーバ神殿があるメッカに生涯の内、一度でいいから必ず詣でる。

● スンニ派とシーア派

スンニは正統派、シーアはそこから別れた派。数からいうと、9：1で圧倒的にスンニ派が多い。ホメイニ師のイランがシーア派。マホメットの跡を継いだ人をカリフ。カリフとは信徒の代表者というような意味で、イスラム教の法王というような意味。カリフの争いで分派。スンニ派の主体はアラブ人でシーア派はイラン人。アラブ人はセム・ハム系で有色人種。イラン人は白人、ペルシャ人。

● 世界の1／5がイスラム教

イスラム教徒は約1.5億人。世界の5人に1人がイスラム教徒。あらゆる人間が神の前では平等。これが世界中に広まった大きな理由。もっともイスラム教徒が多いのがインドネシア。約2億人の人口のうち9割近くを占めている。

● ユダヤ、キリスト、イスラムの三つ巴

まずユダヤ教。ユダヤ教にはメシア（救世主）の信仰あり。ただし、それはユダヤ人を救うもの。ユダヤ人は神様によって選ばれた人間、すなわち選民思想。2千年くらい前にイエスが生まれ、それがメシアであるという評判。ユダヤ民族はイエスを偽メシアとして、処刑。イエスこそ本当のメシアであり、神の子であり、神が別の姿で現れたものであると信じるのがキリスト教。さらにそこにイスラム教が起こって、マホメット(AD570年誕生)という人が神の声を聞いた。造物主であるアラーの神の言うことを聞いた。イスラム教は、イエスの聞いた予言ではまだ不完全で、マホメットの聞いた予言が正しいとする。この3宗教は造物主を認めているという点では完全に一致。すなわち、三つ^{どもえ}巴である。

<世界宗教生誕年表>

キリスト教：BC 4 年ごろ イエス（キリスト）生誕。

イスラム教：AD 570 年 マホメット生誕。

仏教：BC 5 世紀ごろ 釈迦（ゴータマ・シダルタ）生誕。

儒教：BC 6 世紀ごろ 孔子生誕。BC 372 年 孟子生誕。

日本：AD 3 世紀ごろ卑弥呼、AD 5 世紀ごろ大和朝廷成立、AD 604 年仏教伝来

<参考書>

● 井沢元彦の世界宗教口座

いざわもとひこ

井沢元彦：1954 年生まれ、早稲田大学卒業、TBS 政治記者として活躍、著書多数。

● 池上彰の宗教がわかれば世界が見える

池上 彰：1950 年、長野県生まれ、慶応義塾大学卒業、NHK 報道記者、現在フリージャーナリスト、著書多数

<エホバの証人（インターネットより）>

● 概要

エホバの証人（Jehovah's Witnesses）とは、1884年にチャールズ・テイズ・ラッセルにより創始された国際的な宗教団体の成員の名称で、聖書を教典とし世界政府の確立及び全世界が神権政治により統治された社会の実現を支持する組織である。

神エホバとその御子キリストが天と地を支配する「神の王国」（全宇宙的な神の政府）の確立を支持している。

日本では宗教学上「キリスト教系の新宗教」に分類されている。なお「エホバの証人」という名称は、あくまでも組織を構成する個々または全体の成員そのものを指す名称であり組織名ではない。

● 神の名

「エホバ」とは、旧約聖書に描かれる主要な神の名に対応する、日本語表記の1種である。

現在、その正確な発音がどのようなものであったのかについては様々な見解が存在するが、彼らの関心事は「正確な発音」や「正確な名称」そのものにはなく、神の御名が人々の間で高められることに焦点が置かれる。むしろ、正確な発音が神にとって真に重要であるならば、神ご自身がその保存を怠るはずもなく、そういう事実が無い以上、発音それ自体は重要ではない。

● 神の王国

「神の王国」とは、エホバの証人が全面的に支持し到来を期待している新しい社会、またそれを実現する政府であり、心の中にある架空の世界などではない。イエス・キリストを王として天に設立され、遠くない将来、地上においても統治を開始する機関である。

出版物の中ではしばしば、「人間に苦難をもたらす状態をすべてこの地から除去し、永続的な平和と安全をもたらす得る唯一の政府」、「『平和の君』である御子イエス・キリストが治める」、「地上の多種多様な人間の物事を管理する義の世界政府」などと定義されている。1960年代までは「御国（みくに）」と表記されていた。

バプテスマ（洗礼：キリスト教の入信に際して、全身を水に浸す、あるいはそれを模し簡略化した頭部に水を触れさせる儀式）を受けた成員はその王国の「臣民」（「国民」、「民」とも称される）として位置付けされており、すべての成員には、その政府を全面的に支持し、王国の到来に伴う希望（「王国の良いたより）」を布告する義務が課せられている。その布告は主な方法として戸別訪問などを用いて行われる。また王国政府への支持を表明する故に、地上に現存する如何なる政治に対しても厳正中立的な立場を保ち、国旗敬礼や国歌斉唱はもちろんのこと、参加（立候補・投票など）も一切しない。

また、その「臣民」には「神の王国」の法律、「原則」と呼ばれるものに従う義務を持つ。その「原則」と呼ばれるもののなかには、殺人及び窃盗の禁止など多くの国の法律に共通する規則や結婚外での性関係の禁止などの規則が含まれている。

地上における支配は、キリスト教世界の壊滅、国際連合その他地上に現存するすべての政治組織の一掃をもって開始される。それを「ハルマゲドン（全能者なる神の大なる日の戦争）」と言い、如何なる勢力を持ってしても止めることはできないとされている。

● 他宗教に対する見解

他のキリスト教・仏教・イスラム教・ヒンドゥー教・ユダヤ教・その他いかなる宗教も、神の

王国に敵対する偽りの宗教であると主張している。他宗教すべては「ハルマゲドン（全能者なる神の大いなる日の戦争）」の初期段階で壊滅すると主張している。

● 統計

エホバの証人の全世界での伝道者数は 2010 年時点で約 722 万 4 千人である。これは世界人口の約 0.1%である。

日本においては約 21 万 7000 人の伝道者が活動しているとされており、キリスト教として扱った場合、カトリックに次ぐ規模となる。更に、伝道者に至らない聖書研究生を含めると平均で 30 万～40 万人であると予想される。聖書研究を始めてから伝道者として認められ、更にバプテスマを受けた成員として認められるまで、一般的に早くとも 3～5 年程度かかる。中には 30 年以上研究生のままで、なかなか伝道者として認められない研究生や、途中で脱落する研究生も少なくない。

● 主要な教理

- ・進化論を退け、創造論を支持することにも繋がる。
 - ・「父」は、旧約聖書中で「エホバ」と呼ばれる神であり、「全能の神」(Almighty God) である。
「子」は、イエス・キリストであり、全能者なる神ではない。
 - ・「聖霊」は、神の行使する目に見えない力（活動力）である。
 - ・「悪魔」は人の心の内にある悪ではなく、実在の霊者である。神の主権の正しさと人間の忠節に異議を唱えた。人間社会や政府を背後で動かしている。
 - ・霊魂不滅の否定：人や獣そのものが魂である。魂が不滅であることを前提とする、「地獄」及びその「永遠の責め苦」などの概念を否定する。人は死ぬと無に帰す。人間を火で焼くという概念は、神のものではありえない。義人が死んでも「天国」へは行かない。復活後の人類が住む場所はあくまで地上である。霊は生命の活動力であり、人が死ぬとなくなる。生命エネルギーと解釈して良い。
 - ・復活に対するエホバの証人の解釈では、「天への復活」と「地上への復活」の 2 種類があるとされる。天への復活には人数制限があり、その数は 14 万 4 千人であるとされる。一方、地上への復活には人数制限がない。
- ### ● その他、特徴的な教理
- ・戸別訪問による宣教：通常「二人ずつ」ペアで「家から家」の戸別訪問での宣教を行う。
 - ・偶像礼拝を避ける：クリスチャンに求められているのは「霊と真理」による崇拝であり、ここに偶像の入り込む余地はない。崇敬の対象となる像や宗教画は、文字通りの偶像である。国旗敬礼（旗に対する専心）や国歌斉唱（国家の賛美）などは、偶像礼拝である。淫行・性的欲情などの不道徳・強欲なども、神ではなく各種欲求に対する崇拝者となっているという意味で偶像礼拝に当たる。
 - ・タバコ、麻薬（医療目的外）、マスターベーション（オナニー）を禁じている。ただし、飲酒は過度にならない限りは認められている。
 - ・政治的な中立を保つ：神から見て相対的な立場にある人間の政府が課す命令には従わなければならない。ただし、神の掟に背く行為を要求された場合には、神の掟を優先する。神の王国への支持を表明するため、政治への参加（投票など）をしない。
 - ・兵役拒否の他、格闘技の習得も忌避する。

- ・血を避ける：食事による摂取や輸血を拒否する。
- ・イエス・キリストはエホバによって遣わされた者（代理者）である。
- ・誕生日を祝わない。また、キリストの誕生日も祝わない。聖書に記述されている誕生日は 2 例存在するが、そのどちらも異教徒による祝いであるうえ悪い例となっている。
- ・離婚について：再婚が可能な離婚の唯一の聖書的な根拠となるのは淫行である。「だれでも、淫行以外の理由で妻を離婚して別の女と結婚する者は、姦淫を犯すのです」。しかし、配偶者の不倫を知った上で、その後また配偶者と性関係を持つことは、配偶者の罪を許したこと、また結婚関係を続ける願いのあることを示すことになり、離婚の根拠は存在しなくなる。一方、配偶者からの暴力が絶えず、生命の危機が冒されたり、配偶者が当人の宗教活動を禁じたりするなどの根拠では離婚の根拠は成立しないが、やむを得ず別居することは可能であるとされる。

● 医療行為に関して

種痘、ペニシリン、ワクチンは血液を穢す理由から禁止されたと一般に理解されたが、当時はまだ安全性に不備があるので「警告」しただけであって、現在は差し支えないという立場をとっている。臓器移植、骨髄移植の禁止もこれに並ぶ。輸血（全血）は「血を避けなさい、食べてはならない」という聖書的根拠により罪とされているが、自己輸血、血液製剤の使用は各人の良心に基づいて決定するよう教えている。最近では自己血液を、流れる機械に通すのは良いが、固定的に保存するのはいけないと教えている。

● 慣行

- ・毎日、聖書を読んで研究をすることが勧められている。聖書通読の他、毎回の集会の予習を行うことが勧められている。近年は家族が信者であれば、一緒に研究を行うことが強く勧められている。
- ・週に 2 回、集会を行う。
- ・上記以外に年に 1 回、地域大会、巡回大会、特別一日大会が催される。（地域大会においては、毎年新しい出版物や DVD 作品などが発表されている。）支部事務所は、宣教奉仕に週に 1 回は参加することを勧めている。近年、宣教奉仕ではなるべく新世界訳聖書から証言することが強く勧められている。伝道者はみな月末に会衆へ「野外奉仕報告用紙」を自分の氏名を明記して提出しなければならない。それを会衆の書記が集計し、インターネットを通して支部事務所に報告しなければならない。反聖書的な伝統的行事を祝わない。ただし、何を反聖書的とするかはキリスト教の多数派とエホバの証人との間で相違が見られる点が多い。

● 国旗敬礼、国歌斉唱

エホバの証人が国旗敬礼、国歌斉唱を忌避するのは、「人間の国家への忠誠は神への忠誠に準じるもの（相対的なもの）であり、絶対的なものではない」また「神の王国政府の確立を支持するゆえに現存する国家・政治には参与しない」、「国旗・国歌は国家の表象物（偶像）であり、これへの敬礼は偶像礼拝である」とするためである。

● 兵役拒否

聖書中の「戦いを学ばない」「剣を取るものは剣によって滅びる」の適用であり、兵役が義務化されている国々で問題視されることがある。かつては国家はそれに対してエホバの証人を投獄するのが一般的であった。近年では、良心的兵役拒否が人権の一つとして認識されるようになってきたことから、社会奉仕活動への参加を義務付けることによって、兵役の義務の代わりとする事

例も増えている。

●政治に対する姿勢

聖書中の「世のものではない」という聖句などを根拠とし、この世の政治に関わるべきでないという姿勢をとっている。選挙においては、被選挙権の行使はもちろん、選挙権も行使しないのが原則であり、選挙で投票することをしない。ただし、投票義務制をとっている一部の国では例外的に投票が認められる場合もある。

●血液に関する見解

旧約聖書時代からキリストの昇天後についても、一貫して血は神聖なものであり食べることは禁じられているという旧約聖書の教えに基づき、血液を食すること拒む。ただし、血抜きの工程を経て肉はよいとされているが、当然、完全に血が抜かれているわけではないので、あくまでも程度の問題である。これはユダヤ教でも同じである。ただし、エホバの証人においては血を食べることを血を内臓で「消化」することではなく、体に取り込むことと解釈しているため、血管からの輸血も拒否しなければならぬ。特に輸血拒否に関しては、手術や怪我等で出血がひどいなど輸血が不可欠な場合はその治療を受け入れないため、医師やエホバの証人の医師等で構成される医療連絡委員会が輸血の代替医療を行う病院へ転院措置を行う。しかし、結果として死に至る場合もある。

これに対しては、命を危険にさらすものだと非難されることが多い。これに対してエホバの証人側は、輸血という手段を望まないだけで、代わりの代替療法（無輸血治療）を推奨したり、妊娠中絶を否定していることなどを挙げ、決して命を軽視していないという見解を示しているが、輸血による感染の危険性強調したり、無輸血治療の効用を明らかに医学的に間違っただけで奨励するなどの活動が批判の対象になっている。また、大人が死の危険を納得して、輸血を拒否するならば、納得できるとして、そのような判断ができない子供を親の信仰によって死の危険にさらす行為には許されないという世論の声は高い。そのため親が子に対して強制していると見られる場合もあるが子ども自身が聖書に基づき輸血を拒んでいる場合がほとんどである。

●他宗教との関係

原則、冠婚葬祭や年中行事等の参加は禁じられていないが、異教由来の儀式（焼香をあげる行為など）は偶像崇拝にあたりと見做され参加しない。そのため地域社会や親族と摩擦が起きることがある。

エホバの証人は、他宗教を「偽りの宗教」として教義上退けている。宗教多元主義のような考え方や宗教間対話などにも批判的である。

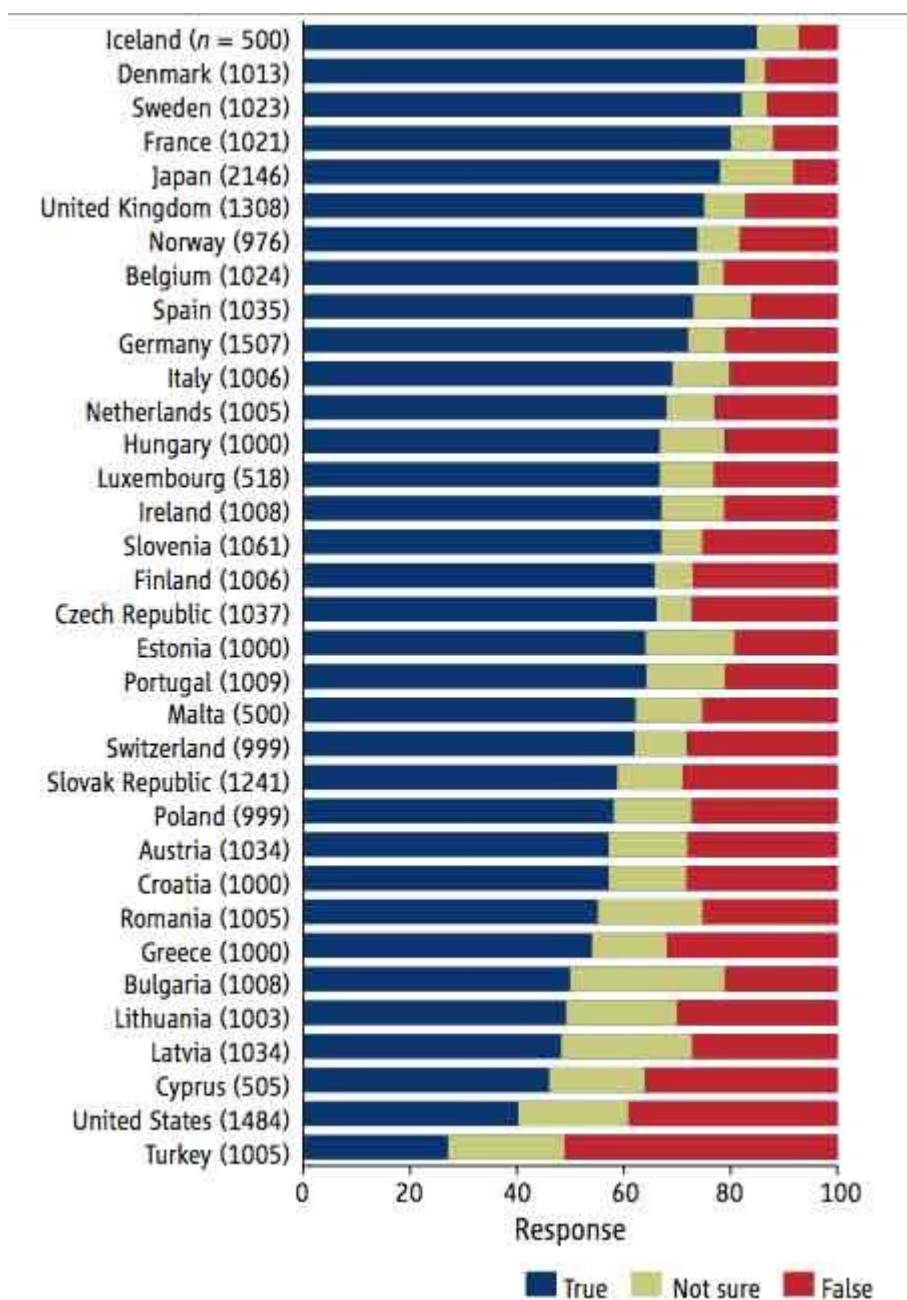
また、七夕や節分、ひな祭りなど、民間信仰の行事にも不参加が基本であり、学校にてこれらの行事が行なわれる際には参加をしない信者の子どもたちも多い。

社会生活の中で広く受け入れられている慣習を、どこまで宗教とみなすかは非常に難しい問題であるため、個別的なケースを見れば、信者個々によって対応が異なるということもある。明確な教義上の違反でない限り、個人の下した決定に対してほかの信者が批判することは許されていない。

教団側も制限を幾分緩和する場合もある。例えば、かつては教会や寺院などでの宗教施設で開かれる葬儀や結婚式には参列しないよう信者は指導されていたが、近年では参列そのものは良心上の問題とされるようになった。

<進化論を信じるか否かについての各国調査>

Photo: Evolution Less Accepted in U.S. Than Other Western Countries, Study Finds



2009年2月6日から7日の間に行われた、アメリカ全土1018名の成人（18歳以上）を対象とした電話インタビュー調査。ギャラップ毎日世論調査(Gallup Poll Daily tracking)の一部。
 設問：「あなたは、個人的に、進化論を信じますか？ 進化の存在を信じませんか？ それともどちらの意見も持っていませんか？」

進化を信じる	どちらの意見でもない	進化を信じない	無回答
39%	25%	36%	1%

- ・ 進化を信じる人が 40%弱。「意見なし」が 25%。
- ・ 実際に進化の存在を信じないと回答したのは全体の 36%。なるほど、信じる割合と同じくらいである。
- ・ 日本では 80%程度の人々が進化の存在を信じているらしい。

<世界の各宗教の人口分布とその他> ← 池上 彰

● 各宗教の人口分布

①キリスト教：22億8062万人、33%

カトリック：11億5065万人、16.7%、(中南米、西欧他)

プロテスタント：4億1980万人、6.1%、

(アメリカ、イギリス、北欧、オーストラリア、南アフリカ他)

東方正教会：2億7023万人、3.9%、(ロシア、東欧)

その他：4億3993万人、6.3%

②イスラム教 (スンニ派90%、シーア派10%)：15億5319万人、22.5%、

スンニ派：90%、(中東、北アフリカ、インドネシア他)

シーア派：10%、(イラン)

③ヒンズー教：9億4287万人、13.6%、(インド)

④仏教：4億6263万人、6.7%、(日本、東南アジア他)

● エルサレム

ユダヤ教・キリスト教・イスラム教の三つの宗教の聖地。

● ヒンズー教とバラモン教

インドの宗教で国民の8割以上が信じている。多神教。ヒンズー教は四世紀頃、古代インドのバラモン教から生まれた。バラモン教は、身分の高い人と低い人がいるとするカースト制や、人は死ぬと生まれ変わるという輪廻の考え(輪廻転生の考え)を持っていた。

<宗教と気候風土> ← 池上 彰

● ユダヤ教と気候風土

中東の砂漠地帯では、人間は本当に無力な存在で、ちょっとした砂嵐に巻き込まただけで、あっという間に死んでしまう。大自然の恐ろしさをひしひしと感じさせる風土。人間は神の怒りに触れると、あっけなく死んでしまうという「旧約聖書」の世界と通じ合う。神様によってすべてが創られているとする一神教の厳しさは、あの砂漠の中だからこそ生まれ、育ってきた。

● イスラム教と気候風土

「コーラン」には、天国についての描写が何度も登場。清らかな泉・川、涼しい木陰、いっぱいの実、ぶどう・鶏肉の食べ放題の世界。まさに、砂漠に育った人にとって天国のイメージ。

● バラモン教と輪廻転生

人は死ぬと生まれ変わるという輪廻の考え（輪廻転生の考え）は、バラモン教から、ヒンズー教・仏教へ伝えられた。熱帯のインドでは、いろんな生命が、いとも簡単に死んでしまうけれど、またすぐに新しく生まれ変わる。輪廻転生とは、そのような熱帯の自然の中から生まれた思想。

<進化論と宗教（インターネットより）>

「生物は進化する」というテーゼは現在では学会で科学的仮説として受け入れられているが、信仰的、社会的に受け入れられているとは限らず、アメリカには進化論裁判の例がある。アメリカ合衆国の南部などいくつかの州では、プロテスタントの一部に根強い聖書主義の立場から進化論が否定されている。ケンタッキー州には、進化論を否定する創造博物館が建てられている。

カトリック教会では 1996 年 10 月にローマ教皇ヨハネ・パウロ 2 世が、「進化論は仮説以上のもので、肉体の進化論は認めるが、人間の魂は神に創造されたもの」だと述べた。つまり、人間の精神活動の源泉たる魂の出現は、進化論的過程とは関係ないとする限定つきで、進化論をキリスト教と矛盾しないものと認めた。

近年アメリカ合衆国のいくつかの州において、創造論（創造主による創造）が明確に学校教育に持ち込まれようとしている。1980 年代には裁判で創造論の理科教育への持ち込みを禁ずる判決が出された。そのために、「神による創造を科学的に解明する」運動が創造科学として湧き上がった。しかし創造科学も創造論と同様に科学ではなく宗教であるという連邦裁判所の判決が下された。米世論調査企業ギャラップ（Gallup）が 2010 年 2 月 11 日に発表した調査結果によると、進化論を信じていると答えた米国人は 40%。 過去 10 年間に行われた調査において、44-47%の人が、神が過去 1 万年ほどの間に、人間を現在のよう形で創造したと信じていると答えている。

その後、創造科学運動は、宇宙や生命を設計し創造した存在を認めるインテリジェント・デザイン説（ID 説）を公教育に取り入れようとする動きがある。インテリジェント・デザインでは、極めて精妙な生物の細胞や器官のしくみを例に挙げて、「複雑な細胞からなる生体組織が進化によってひとりでできあがったとは考えられない。従って創造に際しては『高度な知性』によるデザインが必要であった」といった主張がなされている。また創造科学と同様に創造論に科学的根拠を持たせようと試みているが、運動の中心は「くさび戦術」と呼ばれるものである。これはインテリジェント・デザインの科学的妥当性を立証するのではなく、進化論の不十分な点、まだ説明できない生物の現象を強調する。

保守的なイスラム教でも進化論は否定される。

エホバの証人も明確に進化論を否定している。しかし生物の遺伝による変化は認めている。例えば、色の黒い人からは黒い子供が生まれ、背の高い人の子供は背が高くなる事が多い。同様に例えばトラとライオンは共通の先祖を持ち、一方は縞のある個体に分かれ、一方は鬣たてがみをもつ個体に分かれた。よって両者は姿が似ており先祖は同じであろう。その程度の変化は認めている。

（つまり創造説を取るが、原生生物数百万種が一斉に創造されたのではなく、ある程度は共通の先祖に遡りうるとしている。エホバの証人は、全ての陸上生物はノアの時代の大洪水によって全て滅びたと信じており、ノアの箱舟に乗せられた一つがいのみが生き残ったと信じている。その場合、哺乳類だけでも 4000 種以上もある、全ての陸上動物を一種類ずつ、大型タンカー程度の大きさの箱舟に乗せることなど、物理的に不可能である。よって、すべての種を一つがいずつ乗せたのではなく、ある程度の共通の先祖にあたる動物たち数百種を一つがいずつ乗せたのであるとしていて、現生動物はそれらの子孫たちであるとしている。その場合、たかだか 5000 年のうちに任意の数百種一つがいずつの動物たちが、現在見られるだけの多様性と個体数に増えていることになり、むしろ進化論者以上に、速い速度での種の変化を支持している事になる。ただし、それは進化ではないとし、例えば、魚類が両生類に、爬虫類が鳥類になるといった構造器官が根

本から変わるようなもの、すなわち進化は否定している。(ただし、進化と変化の境界線は明確にはしていない。)

新興宗教「幸福の科学」の教義では、進化論が無神論に加担するものであるとし、ダーウィンは「人びとを無神論に導いた罪」を自らの良心が恥じ、あの世の無間地獄で反省をしているとされる。

生物学者の中には敬虔な信仰を持つものもあり、その一部は生物の進化を神の創造の過程と見なしている。この中には遺伝学者テオドシウス・ドブジャンスキー、現代では分子生物学者フランス・コリンズなどが挙げられる。また他の一部は理神論を信じ、生物の進化と信仰を両立させている。